

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	服部 徹也
主論文題名： 夏目漱石『文学論』をめぐる総合的研究 ——東京帝国大学講義と初期創作を視座に——			
<p>(内容の要旨)</p> <p>本論文は、小説家として知られる夏目漱石（本名金之助、1867-1916）が、東京帝国大学文科大学英文学科講師として行った講義をもとに出版した書物『文学論』（大倉書店、1907）について、英国留学期における初発の構想から講義を経て出版へ至るまでの成立過程を明らかにし、その成立過程と初期創作との相互作用的な生成の問題、諸版本の異同、翻訳、他作家による概念の借用といった受容の問題に亘り、総合的な検討を加えるものである。</p> <p>漱石研究に一大画期をなした研究誌『漱石研究』（小森陽一・石原千秋編、翰林書房、1993年創刊、2005年終刊）終刊以後、研究動向の多様化と細分化に伴い「漱石研究」の現在を語ることは困難になりつつある。しかし、それと相前後して、「講師」夏目金之助の実態に迫りうる資料である帝大生たちの受講ノートが相次いで発見された。本論はこれらの受講ノートを横断的に調査した初めての研究であり、これにより留学期の構想そのものとも、出版された『文学論』本文とも異なる、講義内容の実態が新たに明らかになった。</p> <p>また刊本『文学論』の成立に関わる漱石自筆原稿、中川芳太郎による草稿、その他関係者の証言を検討することで、刊本『文学論』が満足のいく完成形ではなく、なかばアクシデントとして切り出された生成過程の一断面であることを整理した。</p> <p>講義の実態、出版に関わる事情を併せて鑑み、本論では刊本『文学論』の初版本を到達点とする発展史的な把握を行うのみではなく、「生成」という観点から、さまざまな別の発展可能性がありえたことにも眼を向けた。とくに、受講生のノートに記録されていた講義の序論（生前未発表、新発見資料）に注目したり、講義では予告しながらも実際には論じなかったテーマ（音の連なり、文字形状の連なりが文学形式としてどのような効果をもつか、等）をノートや断片、旧蔵書調査から復元したりするなどのアプローチを取った。</p> <p>さらに、『文学論』の生成過程がちょうど漱石が小説家としてデビューする時期と重なることから、初期創作との関係を考察した。とくに、理論を設計図、創作をその実現とみる従来の見解を批判し、創作実践が講義や理論に修正を迫ったこと、あるいは創作実践の革新性に理論化が追いついていないことなどに亘り、理論と創作との「相互作用」を観点として詳論した。</p>			

また従来進んでいなかった『文学論』の受容史について、張我軍による中国語訳、成仿吾による概念の借用など、中国語における受容の一端を詳論し、大正教養主義の読書文化（戸坂潤のいう「漱石文化」）が日本留学生によってアジアに広がるという現象のなかで『文学論』受容を捉えることを試みた。また学問領域や言語、国境を跨いだ言説の伝播と引用が「文学理論」なるディスコースを形成することを示し、『文学論』をもその一例として考察する視座を提示することで、本論を締めくくった。

本論は三部構成、全十一章からなる。以下、各部各章の梗概を示す。

第一部「東京帝国大学英文学科という環境」（第一章～第三章）では、漱石の「文学論」講義が行われた環境について考察した。

第一章「新帰朝者夏目金之助 ——ロンドン留学と前任者小泉八雲の影——」では漱石が英国留学した時代をイギリスの近代文学研究の草創期として概観した上で、漱石の「文学論序」のレトリックを読み解いて漱石が自身の留学をどのように語ったかを分析した。漱石が留学したのはイギリスではまだ近代文学の研究や、理論的な文学研究が本格化する前の時期であり、文献学や作家批評、文学史研究などは行われていたが、文学研究を帰納的に理論化していく発想が本格化していなかった。この留学を語った漱石の「文学論序」を、一定の誇張を伴ったパフォーマンスとして読解した。

また、英文学科の前任者小泉八雲の講義風景を受講者達の回想から概観し、講義「読書論」「創作論」「文学と輿論」における社会進化論と創作の奨励との関係を論じた。とりわけ、八雲の思想的根拠といわれるスペンサーの社会ダーウィニズムが、英文学講義においても基底を形作っていることを論じた。また新しい現代日本文学を創作せよという八雲の主張が、大衆の「心」に語り掛ける創作によって、時の淘汰を受けていく文学作品の受容史に専門的な文芸批評家が関わりうる通路を構想していたことを指摘した。

第二章「帝大生と「文学論」講義 ——受講ノートと時間割——」では漱石の書簡や作品に現れる講義風景、受講ノート観に着目したうえで、講義を受講した学生達（若月紫蘭、岸重次、森卷吉、金子健二、中川芳太郎、木下利玄）の受講ノートを研究する意義を述べ、資料および学生達についての情報を整理した。公刊された受講ノートは金子健

二のもののみであり、そのほかの受講ノートについては所蔵館に赴き、写真撮影や翻刻を行った。これらのノートには、のちの刊本『英文学形式論』『文学論』『文学評論』にはみられない論点や、授業中の漱石の余談など興味深い記述が多くみつかる。また学生たちはのちに英文学者や作家になっていったため、そのことにも簡単に触れた。

とくに刊本『文学論』の草稿作成を担った中川のノートは現在まで未整理のままに置かれていた。混乱したページ順を整理し、綴じられていないノートが二系統のノートの混在したものであったことを証明した。また金子健二、木下利玄の日記から、彼等の受講していた時間割を再現した。

第三章「「形式論」講義からさぐる文学理論の構想 ——「自己本位」の原点——」では、漱石帰国後初の講義「形式論」について受講ノートとの比較、旧蔵書調査を通して検討した。まず留学期の構想と講義との接合部をなすものとして「序論」が存在したことを森巻吉ノート、岸重次ノートおよび他学生の回想、旧蔵書などから論証した。

その序論の内容から、シスモンディやブランデスといった比較文学研究の草創期の批評家の学問的姿勢から漱石が影響を受けた可能性を論じ、あわせて漱石が序論で説く「模倣」と「独創性」の関係を整理した。

また「形式論」講義を没後刊行した『英文学形式論』に編集段階での操作がある可能性を示唆した。自身を「代表」として、いわばサンプルとして差し出して、日本人が英文学をどの程度まで理解できるか考えたいという趣旨の文は、『英文学形式論』に収められ、同書はしがきでも重ねて強調されているが、受講ノートのそれに相当する箇所には同趣旨の文がない。森ノートの序論のなかにのみ、対応する文言が見つかるのだ。

さらに留学期の研究構想と帰国後の講義の実態の落差、すなわち講義計画を変更し、「形式論」講義の半分が放棄されたことに注目し、講じられずに終わったテーマ（言語間の音韻の差や表記する文字の形状による効果に着目して日本文学を基礎付けようとする構想）について草稿と照らし合わせて論じた。以上により存命中の漱石が黙殺した「形式論」講義こそが、自身が「未成市街の廢墟」と呼んだ文学理論の構想の壮大さを最も鮮明に伝えていることを示した。

第二部「「文学論」講義と初期創作」（第四章～第七章）では、漱石の講義と創作の関係を、『文学論』出版にむけた加筆修正作業から考察した。

第四章「シェイクスピア講義と劇場の隠喩 ——「マクベスの幽霊に就て」から『倫敦塔』へ——」では、漱石の「文学論」講義がシェイクスピア講読講義と並行していたことに注目する。「一八世紀文学」講義の木下利玄受講ノートにみえる漱石のロンドンでのハムレット観劇についての記述を参考に、当時のロンドンでのシェイクスピア上演の装置についてヘンリー・アーヴィングを中心に概観し、アーヴィングの色電気などの照明技術を取り入れた川上音二郎一座の「沙翁」劇講演を観た学生達とのシェイクスピア上演に関する認識の落差について考察した。

そのうえで、漱石の論文「マクベスの幽霊に就て」が問う観劇慣習(コンヴェンション)の問題を取り上げた。すなわち、劇中のバンクォーの幽霊が怪異存在なのか、精神の昂ぶったマクベスが視た幻覚なのか。そしてそれを表現するために舞台上に幽霊役を上げるべきか否か(観客から見えるべきか、見えないべきか)といった議論である。そこで同文中の議論を漱石が用いた Furness 版、Deighton 版『マクベス』の注に遡り、注にない情報も補った上で整理し、漱石の見解の特色を取り出した。これらの議論の根底には、舞台上で起こる出来事を観客がどのように作品世界として受け止めるのか、その暗黙のルールや慣習にかかわる。その慣習は時代によって変化するが、とくに明治末期の演劇界では西洋演劇の観劇慣習とそれ以前の日本の観劇慣習がぶつかりあう転換期であり、そのことをふまえずして「マクベスの幽霊に就て」の意義は理解できない。

またこの問題が『マクベス』の解釈のみに関わるのではなく、漱石の文学理論形成の一環であることを示すため、同論考が東京帝国大学における漱石の『マクベス』講義期間中に執筆されたことを踏まえ、同時期の「文学論」講義との相互乗り入れ関係について「超自然F」を取り上げて論じた。「文学論」講義においても、観客が劇に夢中になってのめりこむことを論じる際に、シェイクスピア劇(についての議論)を参照しているのである。

さらに 1904 年末から翌年初頭にかけて、すなわち作家・漱石出発期の背景で夏目金之助がどのような講義を行っていたかを、受講生のノートをもとに分析した。なかでも、刊本『文学論』に収録されなかった講義箇所では、悲劇・喜劇の受容体験に共通する物語構造や、それを悲劇／喜劇として識別する観客の情緒の作用が論じられていた。こうした演劇論をアナロジーとして用いて漱石の文学理論が構成されつつあったことを論じるとともに、『倫敦塔』に用いられた虚構のための「虚偽」の作用や、劇場空間の隠喩を読み解いた。

第五章「《描写論》の臨界点 ——視覚性の問題と『草枕』——」では『文学論』出版に際しての描写論の理論的変更点と、『草枕』創作との関係を論じた。漱石はイギリス留学期の草稿『文学論ノート』、それをもとにした東京帝国大学講義「General Conception of Literature」、講義をもとにした『文学論』(大倉書店 1907)出版という文学理論の構築過程において、描写理論を増強していった。本章は 1906 年末から 1907 年初にかけて描写論へ大幅な増補が行われたことを『文学論』原稿、自筆メモ、講義の学生達の受講ノート等の諸資料をもとに明らかにした。

なぜこの描写論の増補が重要かといえ、『文学論』の根本原理である作品世界への没入体験、「幻惑」に密接に関わるからである。と同時に、この増補を行った時期が小説『草枕』の執筆時期でもあり、両者の間に重要な「描写」をめぐる連動があることが重要である。

描写論の増補に先立って、漱石の留学期の「文学論ノート」、帝大講義の受講ノートにおける描写論を検討してみると、そこには読者の視覚に訴えられる演劇や絵画と、視覚に訴えることが不可能な文学作品との芸術形式上の差異に無頓着なまま、両者をアナロジーで接続する議論が散見される。そうした議論がカットされ、代わりに小説独自の視覚の(擬似的)再現の可能性をさぐったのが『文学論』の描写論増補である。

他芸術とのアナロジーの問題は、文学についての理論的研究が行われていなかったことに起因し、他の芸術に関する美学的理論を援用しながら文学について論じるほかなかったという時代的制約もある。他方で、漱石が文学を他の芸術との関係からクロスジャンルの的に考えることそれ自体にも意義があった。漱石の初期作品は他の芸術ジャンルとの豊かに交差し、独特の作品世界を作り上げているからである。

この増補時の漱石の理論的課題が視覚性の問題であることを論証し、漱石がこの課題に小説『草枕』でも、絵画や能などのイメージをちりばめ、かつそれらのイメージの運動を記述することで取り組んでいたことを示した。しかし、『草枕』のような作品を読む際に生じる視覚性とイメージ連鎖を『文学論』の記述に基づいて説明しきることはできない。

『文学論』は読者の認知過程に多くを委ねる理論であるため、説明不可能なブラックボックスを抱えている。そもそも『文学論』が論じる「幻惑」の読書体験は、「自己催眠的」な読者の協力によって成り立ち、そうした読者の一回的な読みが傍証となって理論の有効性が示される性質のものなのである。本章は『文学論』と『草枕』の緊張関係を読み解き、漱石が困難を冒して描写による「幻惑」とその理論化に挑んでいたことを示した。

第六章「「間隔的幻惑」の論理 —— 哲理的間隔論と『野分』 ——」では、漱石が『文学論』で「間隔的幻惑」と名づけた、読者が物語世界に引き込まれ、作中人物に接近・同一化する錯覚を論じる。それは読者の識域下の共犯的な振る舞いにより実現されるのだが、その際作者の存在は忘れられるという。この論が『文学論』全体にとって大きな意味をもつことを、同章におけるスコット『アイヴァンホー』の分析などを通して示し、「間隔的幻惑」がもつ読書行為論的側面を、他章と接続して読解することで確かめた。

とりわけ、漱石が「催眠」のメタファーで読書行為を論じていることに注目した。漱石の理論にとって、読書行為は作者が読者に魔法をかけて一方的に物語世界に引きずりこみ、何かを見せつけることではない。作者の表象形式への暗黙の同意をもった読者が、虚構であることを承知のうえで、進んで協力して虚構を「本当であるかのように」受け取るという、コミュニケーションの成立として漱石は虚構作品についての読書行為をとらえていたのである。そして、その行為に従事しているとき、読者にとって作者は物語世界からはもっとも遠く、存在を忘れてしまうことができる。

しかし、このことは同時期の漱石の創作、とりわけ『野分』における「作者」を自称する饒舌で批評的な語り手の存在と一見して背馳する。

そこで本章は『文学論』の生成過程に視野を広げ、『野分』脱稿後に苦し紛れに『文学論』に加筆されたというほかない説明不足の概念、「批評的作物」「哲理的間隔論」に着目した。すなわち、著者の見解に読者を同意させる「幻惑」の総体的な正否は、時空間の設定などの形式論だけでは説明が付かず、「見識」や「主張」の説得力にかかわるとするのが「哲理的間隔論」である。

これに照らして『野分』の音楽会や読書、園遊会や演説会という場면을「形式的間隔論」を駆使して読み解いた。読書や演説会場面に読者・聴衆の反応などが描かれていることから、これらが『野分』の読者を幻惑する空間として表象されていることを論じ、単なる論文には持ち得ない幻惑の装置としての機能、社会への「感化」の意志が『野分』という小説に託されていたと位置付けた。技巧と思想とは切り離せないものであると繰り返す 1906 年前後の漱石にとって、社会を感化すべき自己の思想は、それを伝えるに最も効果的な技巧を凝らされねばならないものであったといえる。このように『文学論』の生成と同時期の創作とを同時に考察することで、文学者としての思想の鮮明化が『文学論』加筆に影響を与えた可能性の一端を示した。

第七章「「集合的F」と識域下の争闘 ——「一八世紀文学」講義と『二百十日』への一視角 ——」では漱石による書き下ろし原稿に差し替えられ、不用となった草稿である中川筆草稿「第五編 集合Fの差異」を分析し、講義（金子健二の受講ノート）、中川草稿、漱石の書き下ろした原稿、さらにごく一部分であるが講義草稿も参照し、『文学論』第五編「集合的F」を検討した。

第五編「集合的F」は文学作品がたどった毀誉褒貶の歴史、不遇の天才や、無益な流行などのケーススタディを行いつつ、フランス革命などさまざまな社会現象と同列に考察していき、「集合意識」の推移に法則性を見出そうとするものである。

ここに、単に「集合意識」が焦点化するもの（集合的F）だけではなく、「集合意識」が意識していない、識域下にあるもの(㊦)についての議論に注目した。『文学論』では個人意識を論じる際にも、W・ジェームズの「心理学」や「催眠」のメタファーなどをとおして、識域下のレベルでの説明を行ってきたからである。これについて、漱石が用いた典拠のなかからK・グロース『人間の遊戯』におけるG・ル・ボンやG・タルド、J・M・ボールドウィンらの群集心理学、心理学的社会学の思想を祖述した箇所注目し、漱石の旧蔵書書入れを参照しながらその理路を辿った。

さらに、群集心理学に依拠する「集合的F」を講義していた時期が日露戦争末期であり、広瀬中佐の軍神化などに言及があったこと、またフランス革命への言及を繰り返していること注目した。さらに、『文学論』出版原稿への加筆が本格化する直前の時期にあたる創作『草枕』、『二百十日』、『野分』に底流する社会変革のモチーフの変容を、上記の戦争や革命というイメージとの関係から論じ、これらの創作が「一八世紀文学」講義からの影響を受けていたことを木下利玄の受講ノート等から跡づけた。同時に、『吾輩は猫である』『菴露行』『草枕』といった自作を「一八世紀文学」講義に用いて、自作を擁護したり、その革新性を暗示したりするなど、創作が講義に反映していたことも示した。

第三部「『文学論』成立後の諸相」（第八章～第十一章）では、『文学論』刊行後の諸版本のあり方、漱石没後の文学概論書の需要と受容、中国での翻訳と変容について論じた。

第八章「「不都合なる活版屋」騒動 ——単行本の誤植について——」では著者漱石に初版千部を庭で焼きたいとまで言わしめた『文学論』単行本の初版から第四版までの誤

植の実態を捉える。また本文校訂にあたった中川芳太郎が、その時期にどのような状況にあったかを可能な限りの資料から検討し、誤植が見逃された事情を知るための参考とした。

「不都合なる活版屋」とは『東京朝日新聞』紙上で誤植の責任を問うた無署名記事の題であり、同書の印刷所秀英舎を指す。同印刷所による単行本初版、正誤表、第二版、第三版、第四版の本文を比較した。初版の誤り五三〇箇所以上を訂正する「正誤表」自体にも、誤植や指示の誤りなど八〇箇所以上の問題点がみつかった。第二版では「正誤表」の訂正漏れや新たな誤脱が起きており、第三版が相対的に最も修正が反映されているものの、誤脱は残った。書店・印刷所の火災を挟んだ第四版は新たな誤植や初版の誤りに戻ってしまった箇所が散見される。

加えて、単行本第四版の後、漱石没後出版となる諸版本についても本文に関わる基礎的な情報を整理した。縮刷版『文学論』には森田草平による独自の新たな修正、英文の日本語訳箇所の訳し直しなどが見られる。各次『漱石全集』所収版『文学論』にもそれぞれの本文編集の方針に基づきいくつかの補訂が行われた。関東大震災後刊行の第三次『漱石全集』所収版では小宮豊隆、岩波書店員和田勇による綿密な校訂が行われ、これが岩波書店の現行『定本漱石全集』版に続く本文の基盤をなすものといえる。

これまで『文学論』を論じてきた文芸批評家たちは「本文」の問題に無頓着であったが、それぞれの『文学論』批評が数次にわたる再刊や『漱石全集』改訂などの節目とともにあった。また本論第十章、第十一章で述べるように、翻訳や受容の問題を考えるうえでも、版本の異同についての知見は必要不可欠である。

第九章「『文学論』と『文学入門』——小泉八雲の帝大講義録——」では漱石没後の『文学論』受容を考えるうえで、より広く読まれた厨川白村『近代文学十講』や小泉八雲の講義録（『文学入門』などのタイトルで日本語訳刊行された）に注目した。森鷗外が早くから考察していた「民間学」を、商業ベースで実現したものとして、石原純を中心に据えた岩波書店の雑誌『科学』や「科学叢書」、「通俗科学叢書」などを位置付けた。専門的アカデミズムとは異なり一般社会への知の普及をめざす「通俗科学」（ポピュラー・サイエンス）の裾野の広がりの中で文学入門書を捉えることを試みた。また、文学入門書は「鑑賞」をキーワードとして参入障壁の低さを一般読者に向けて訴えると同時に、方法論の曖昧さゆえに文学を神秘化することにもなり、より科学的な研究を求める論争を呼んだことへ説き及んだ。最後に、中国語圏における小泉八雲講義録の中国語訳出版について略述した。

第十章「張我軍訳『文学論』とその時代 ——縮刷本・『漱石全集』版の異同を視座に——」では張我軍による中国語全訳・夏目漱石『文学論』（上海：神州国光社、1931）の翻訳底本推定を行った。その際、張我軍やその友人の回想のみを論拠とするのではなく、原著『文学論』の諸版本の本文異同調査を通して、翻訳底本が漱石没後の本文変更を伴う縮刷本であることを明らかにした。縮刷版『文学論』の校訂について検討し、また訳文の一部に『漱石全集』版の変更点が反映されていることをも示し、翻訳底本が混用された可能性を示唆した。

続いて、受講生の手を借りて作られた原著『文学論』本文が、「漢文訓読体」という文体を採用したことにより生じる多義性や、漱石が講義で英語を用いて述べたテクニカル・タームが日本語訳されていることなど、『文学論』の「原文」は漱石本人の「声」でも「文体」でもないことを論じた。

このように『文学論』の本文の混成性・複数性を明らかにすることにより、原文の明瞭さを賞揚して張我軍の訳文の解りにくさを批判した王向遠（中日比較文学論、翻訳論の研究者であり、中国語新訳『文学論』[上海訳文出版社、二〇一六]の訳者）の「原文」把握の曖昧さを批判した。また王向遠は「原文」と称して1966年版『漱石全集』所収本文を用い、張が用いえた原著諸版本間の異同に注意を払わなかったが、上記の通り諸版本の異同を系統立てて整理すると、張の誤りとされた箇所のうち一つが原著の誤脱であったことも判明した。

以上の翻訳底本推定に併せて、訳者張我軍が台湾出身で日本語教育を受けて育ち、北京に学び周作人らの薫陶を受け、やがては大東亜文学者大会への参加など日本の大陸政策に加担するという略歴や、出版社神州国光社がおかれていた政治的状況、とりわけ共産党と国民党との対立の中間を行く知識人達が日本語を介して学術・理論を受容する経路となっていたことを示し、『文学論』翻訳出版時の中国における日本の文学理論が置かれた政治性について考える緒を探った。

第十一章「文学の科学という欲望 ——成仿吾の漱石『文学論』受容と〈微分〉——」では上海で活動した創造社同人の批評家成仿吾の批評「『残春』の批評」（『創造季刊』1923・2）、「詩の防御戦」（『創造週報』1923・5）における〈微分〉に注目した。成はこれらの評論において魯迅・周作人ら旧文壇の認識を痛烈に批判する時、夏目漱石『文学論』の概念(F+f)を数学の〈微分〉と組み合わせ、数式やグラフを用いて議論を行った。

成仿吾が留学した 1914-1921 年の日本は漱石称揚の時期であり、石原純や田邊元が岩波書店を拠点に科学ジャーナリズムで耳目を集めた時期でもあった。文学・科学・哲学を跨いだ思考を志すこうした読書文化の広がりや、後に戸坂潤は「岩波文化」「漱石文化」と呼ぶが、東京帝国大学に入学した成がこうした文化に触れていたことは想像に難くない。とくに田邊元はこの頃、〈微分〉を援用して「思惟の本性」を論じるヘルマン・コーエンの議論を日本に紹介していた。〈微分〉を『文学論』の概念に組み合わせた成の発想を、単なる独創というよりもこれらの日本語論状況との関係において捉えるべきものであることを論じた。

こうした成仿吾の〈微分〉を用いた文学批評を題材に、言語や学問や国の境界を越えて或るテキストが「文学理論」と見なされる過程で「文学の科学」を求める欲望の現れが見られること、漱石自身もまた「文学の科学」への欲望を吐露していたことを併せて論じた。以上により、言説編成の産物としての「文学理論」という視座から『文学論』を捉え返す意義を提示した。

本論文は以上の構成により、『文学論』のもととなった講義の置かれた環境をふまえ、そして講義の進行と創作、出版原稿修正との相互作用的關係を論じ、『文学論』刊行後の受容の諸相を捉えることで、『文学論』を中心とする夏目漱石の文学理論の総合的な理解を試みた。

Subconscious Struggles: The Lecture “English Literature in 18th Century” and *Nihyakutouka* (210th Day).

In **Part 3: Various Approaches to the Post-publication *Theory of Literature***, I examine *Theory* from various theoretical frameworks: a textual criticism approach; the reception of literary criticism after Soseki’s death; post-colonial translation studies; and various appropriations of Soseki’s concepts. It includes four chapters; **Chapter 8: The Trouble with an Unpardonable Printer: Textual Criticism and the Hardcover Editions of *Theory of Literature***, **Chapter 9: *Theory of Literature* and *An Introduction to Literature*: The Publication of Koizumi Yakumo’s Lectures at the Tokyo Imperial University**, **Chapter 10: A Historical Review of Zhang Wojun’s Chinese Translation of *Theory of Literature*: A Textual Critique of the Pocket Edition and *The Complete Works of Soseki***, and **Chapter 11: Cheng Fangwu and the Desire for a Science of Literature: The Addition of “Differentials” to *Theory of Literature*.**